



世界の子どものことばの教室

継承語としての日本語コース

シドニーからの報告

ニシムラ・パーク葉子*

©2012. 「移動する子どもたち」研究会. <http://www.gsjal.jp/childforum/>

1. 2011年、ヘリテージ・コースが始まった

オーストラリアでは1月末に新学年が始まる。私は最近ニューサウスウェールズ州（以下 NSW 州）教育省で教材開発，教師養成，教科書執筆の方に力を注いできたが，今年はそれを継続しつつ，久しぶりに教室に戻り，ヘリテージ・ジャパニーズと呼ばれる「継承語としての日本語コース」を教え始めた（以下ヘリテージコース）。

このヘリテージ・コースは連邦政府の予算で作成され，まず2011年にNSW州でインドネシア語，中国語，韓国語，日本語の4ヶ国語のコースが開講された。シラバスにその理論的根拠が以下のように述べられている。

オーストラリア政府は国民がアジアに対する教養を持ち，アジアの言語が読み書きできるようになることを奨励している。

政府は影響力の強い近隣諸国との政治的，社会的，そして文化的つながりを発展させていく重要性を認識し，またオーストラリアの経済的見通しと関連して日本の言語を学習することが戦略として極めて重要であると認識している。ヘリテージ・コースの学習者はこの政府の政策に大きく貢献するものである。

(Board of Studies New South Wales, 2010, pp. 5-6)

ヘリテージ・コース新設のもう一つの背景となっているのは，移民の増加に伴い，その子

* ニューサウスウェールズ州教育省 (Eメール: Yoko.Nishimura-Parke@tafensw.edu.au)

どもたちの言語教育のニーズが高まってきたことであろう。2006年のセンサスによると、シドニーの35%の人口が家庭では英語以外の言葉を使っている（Australian Bureau of Statistics, 2006, p.34）。

アジアからの移民の子どもたちが自分の家庭で使っている言葉を学校教育で学習しようとする、バックグラウンド・スピーカーズ・コースか、一般のハイスクールで教える外国語としての日本語のコースか、以前はこの二つの選択しかなかった。

例えばバックグラウンド・スピーカーズ・コースというのは、日本で、あるいは日本人学校で主な教育を日本語で受けてハイスクールの年齢に達した子どもたち、あるいは親の海外赴任などの理由で短期間オーストラリアに来ている子どもたちなど、ネイティブ・スピーカーの為のコースである。そして、外国語としての日本語のコースは、全く日本と接触なしに育った子どもたちのコースである。当然、どちらのコースもこの子どもたちにはふさわしくない。

そのような事情から特に移民の多いシドニーなどでその両親らを含むコミュニティー・グループからの継承語としてのアジア語のコース設立の要請が高まり、Board of Studiesなどの州政府教育機関を動かした、という一面もあったと聞いている。

2. クラス名簿がなかなか確定しない

ヘリテージ・コースは、11, 12年生の2年間の選択科目として正規のカリキュラムに組み込まれているが、各学校でクラスを設けるほどの生徒数がないため、このコースを選択した生徒はサタデー・スクールと呼ばれる土曜日だけの学校に登録する。

普段は違うハイスクールに通う生徒が週1回土曜日にこの土曜学校に集まり3時間の授業を受ける。2月に13人でスタートした私のクラスも毎週増えたり減ったりして漸く1学期ももうすぐ終わるという3月半ばになって、やっと20人で落ち着きそうである。最後に入ってきた生徒には一学期のほとんどの学習内容を短時間でなんとかしてカバーさせなければならない。

なぜ人数が決まるのにそんなに時間がかかるのか。それは、このヘリテージの子どもたちは、まさに「言語教育カテゴリー間を移動する」子どもたちだからである（川上, 2010）。

ヘリテージ・コースの日本語レベルは、上記のバックグラウンド・スピーカーズ・コースと一般のハイスクールで教える外国語としての日本語のコースの中間に設定されている。

シラバスには、「このコースをとる生徒は、コース開始以前にあらゆるレベルで日本の文化に親しんでいること、そして多様な日本語の能力と知識を得ていること」とした上で、コースを始める時点で「オーストラリアの小中学校や地域社会で何らかの日本語の学習をしたことがある」そして・または「10歳までに日本語での正式な学校教育を受けたことがあ

ると言う基準を設けている（Board of Studies New South Wales, 2010）。

バックグラウンド・コースに入るべき生徒がヘリテージ・コースに入らないように、ヘリテージ・コースの生徒が一般の日本語コースに入らないように、学校側は各生徒の資格（日本語学習の経歴）をチェックするのだが、そのプロセスが複雑で時間がかかる、という事が一つ。そして、学期が始まり学習を始めてから、自分のレベルに合わないという理由でコースの変更願いを出す生徒もいる、というのが二つ目の理由である。その他、保護者がオーストラリア海外に住んでいて書類にサインをするのに時間がかかった、学校の手続きミスで間違ったコースに登録されていた等の例もあった。クラスに参加できると思って土曜校にやってきたのに、手続きが完了していないため帰されたというかわいそうな生徒もいた。やる気のある生徒はとりあえずクラスに入れて学習を始めさせることを優先してやってほしいと、教師の立場からは強く思う。

3. 私のクラスに集まる生徒たち

ヘリテージ・コースの生徒は、ほとんどの生徒は日本人の両親を持ち、幼い頃からこちらに住んでいる生徒たちだが、オーストラリア人の両親を持ちながら日本で生活した経験があり、日本の小学校に通ったことがある、という理由でこのコースに入ったという生徒もいる。日本人と中国人、あるいは日本人と韓国人の両親を持つ生徒もいる。

日本語のレベルは予想通り、いや、それ以上に千差万別、十人十色、20人20色である。もちろんみんな英語の方が断然強いので、気を抜けばお互い英語で話し始める。まず、言葉は使えば使うほど上達するものだから、書く、話す、ボディーランゲージなど体を使って練習することの大切さを強調。この教室を小さい日本だと思ってお互い日本語で話すように励みます。

レベルはばらばらでもやはり共通点は「聞く」「話す」は「読む」「書く」よりも得意で、「読む」は「書く」より得意であるという事が一つ。もう一つは外国語としての日本語学習者には上級の表現、例えば男女の言葉の違いを使いこなしたり、擬態語・擬音語等が自然に使える反面、幼児語が残っていてスピーチにも「お絵描きが好き」「おねえちゃんと仲がいい」という言葉遣いを混ぜて使う生徒が多いということであろうか。

バイリンガルの卵たちに日本語を教えることは非常に楽しい。一番初めの授業で、いろいろな絵本を配って、その絵本のレビューを日英、両言語で書かせた。全く未知の生徒たちが一体どの程度の読解力と書く力があるのか見たかったからである。一人の生徒は「まんが日本昔話」の「ざしきわらし」のお話について書こうとしていた。

生徒 A 「先生、ざしきわらして英語で何ですか。」

私 「そうですねえ、どんな英語がピッタリくるかな？どう思う？」

生徒 B 「ざしきわらして妖怪だよね」

生徒 A 「じゃあ、妖怪って英語で何？」

生徒 C 「Ghost じゃないよね？」

生徒 D 「ちがうよ、Monster かな？」

生徒 E 「Spirit じゃないの？ざしきわらして Child spirit って感じ？」

一つの質問に対して、近くに座っている生徒が自由に意見を言い合うのは、さすがオーストラリア育ちだな、と思う。しかも一番最初の授業でこれ出来るのは教師としてうれしく、楽しい。

また、最近の授業で、1980年代に作られた映画（家族ゲーム）と1990年代に作られた映画（しあわせ家族計画）を見せてそこに描かれている家族の姿から、価値観の違い、社会問題、男女の役割等について考えさせた。そしてオーストラリアでも同じような変化があるのか、ディスカッションをした。最後の学習活動として、各映画から1人の登場人物を選び、その人たちが出会ったとして、どんな会話をするだろうか、その会話を作ってみんなの前で演じてみせる、というペアワークをやらせてみた。げらげら笑いながら、あるいは立ち上がって実演しながら、または映画のあらすじを確認しながら、全員集中して取り組んでいた。

みんなの熱演は来週の授業のお楽しみである。しかし、子どもたちの創造力とユーモアのセンス、人物像に合った言葉遣い、しかも価値観の違いを上手に表現しているものもあり、私はそのスクリプトを読みながら涙が出るほど笑った。

4. 試験のあり方に疑問はあるが・・・

このコースは11年生12年生の2年間で

1. Young people and their relationships
2. Traditions and values in a contemporary society
3. The changing nature of work
4. The individual as a global citizen
5. Japanese identity in the international context

という5つの分野を Personal, Community, International という3つの観点から学習する。

もちろん、認定教科書のようなものはない。これが、つらいところであり、面白いところでもある。つらいというのは、12年生の終わりの卒業試験（Higher School Certificate :

HSC) の成績で希望する大学に入れるかどうかが決まるので、できるだけいい成績を収めさせたいと思うが、範囲が広すぎてどのような問題が出るのか予想が全くつかないからである。ヘリテージの子どもたちを教えたことのない、接したこともない人たちによって書かれる試験によって子どもたちが評価されるということの理不尽さも、仕方のないことなのだろうか。一人一人がカラフルな資質を持ち、とてもユニークな可能性を持つ、このヘリテージの子どもたちを一つの限定された枠にかけられて評価されてしまうことに疑問を禁じえない。が、どこかでスコアを出して優劣を付けなければならないというシステムは何もヘリテージに限ったことではない。どの教科もそうなのだ。ならば、どうしてヘリテージの場合、不公平感が強いのだろうか。それは、この生徒たちの日本語のレベルはそれまでにどれだけ日本語に触れて育ってきたかという点に大きく左右されていて、本人の能力の差というより、育ってきた環境の力が大きいと感じるからかもしれない。

過去 20 年にわたって外国語としての日本語教育に携わってきたが、現地の生徒が日本語を第二語学としてハイスクールで始める場合、能力も多少の差はあっても、このような環境の差によるスタートポイントの激しい差はなかった。

例えば、生徒 F さんは、日本人の両親を持ち、2 歳でオーストラリアにやってきた。幼稚園に入るまで家庭では日本語を使っていた。幼稚園の先生が、F さんが英語をあまり理解していないことに気づき、家庭でも英語を使うように両親に薦めたそう。その為、両親は自分たちにとって外国語である英語を使って F さんを含む 4 人の子どもたちを育てた。自分の子どもに母国語を使わないで育てる、その苦労は大変なものだったことは想像に難くない。そしてその結果、今、F さんの日本語レベルは外国語として日本語を学習する生徒たちと変わらない。緊張すると強い英語のアクセントが出ることから、日本語からかなり離れて育ったことが窺える。

一方、日本人の両親を持ち、家ではいつも日本語を使い、日本語の補習校等に通ってきた生徒 G さんは、語彙も表現も豊かで、話していると若者言葉も使いこなし、余裕を持って冗談も言えて、日本の高校生と変わらない。

他にもいろいろな例を挙げればきりがないが、この生徒たちは今 15 歳。この 15 年間の日本語のインプットの量の差は果てしなく大きく、単にこのコースで 2 年間学習したからと言って差が狭まるとはいえない。いうまでもなく、差を縮めることは目的ではないのだが、狭まる可能性より、広がる可能性の方が大きいと、1 学期の終わりに感じている。

このような学習者達に対して、読めないといけない漢字はこの 5 百字、理解しなければならぬ文法事項はこれこれ、というような硬い枠内で書かれた試験で「評価」され、「ランキング」されることに対して、私は深くため息をついてしまう。試験のことを考えなくてもいいならどんなに楽しいことか、と思う。

しかし、まだ 11 年生が始まったばかり。試験のことを憂いているのは、生徒より私のほうである。せめて今年は生徒の興味ある分野に焦点を当て、考えさせ、意見を引き出すきつ

かけになるようなおもしろい教材を選んでいきたい。楽しい授業を通して、全員のその子なりの日本語レベルの上達につなげていければ、と思う。その子なりの、というところがとても大事だと感じている。そして、生徒全員がバイリンガル・バイカルチュラルである自分を大きく羽ばたかせることができる、そんな授業を目指したい。

文献

Australian Bureau of Statistics (2006). *Sydney Social Atlas*.

<http://www.abs.gov.au/ausstats/abs@.nsf/mf/2030.1/>

Board of Studies New South Wales (2010). *Heritage japanese stage 6 syllabus: Preliminary and HSC courses*. Sydney: Board of Studies NSW.

http://www.boardofstudies.nsw.edu.au/syllabus_hsc/pdf_doc/heritage-japanese-st6-syl.pdf

川上郁雄 (2010). 「移動する子どもたち」のことばの教育学とは何か『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』1, 1-21.

http://www.gsjal.jp/childforum/journal_01.html